

「特別の教科 道徳」の教科書の内容分析

—— ジェンダーの視点から ——

藤 岡 秀 樹

一 はじめに

二〇一七年に小学校と中学校の学習指導要領が告示され、道徳の教科化が提示された。小学校では二〇一八年度から、中学校では二〇一九年度から実施された。教科化に伴い、これまでの副読本や読み物資料から、教科書を中心に据えた授業展開へ移行した。

道徳の教科化については、教師のなかでも、研究者のなかでも賛否両論があり、現場では指導や評価のあり方について、当初は当惑や混乱が見られていた。

筆者はこれまでに、文部科学省が作成した『心のノート』の内容分析(藤岡、二〇〇四)や、道徳科のもつ問題点とより良い道徳科の授業づくりの論点を指摘した(藤岡、二〇一八、二〇二〇)。さらに、教職課程の受講者に対する「道徳の時間」の学習内容の振り返り調査や教科

書の内容分析を行った(藤岡、二〇二二)。

教科書の単元や内容を詳細に検討すると、さまざまな課題を有する教材と心に響く道徳性を高めることができる教材とが混在していることも分かった。

本論文では、ジェンダーの視点から、道徳科の教科書の内容分析を行うことを目的とする。紙幅の関係上、事例については数点に絞りたい。なお、本論文では、「特別の教科 道徳」を「道徳科」と略記し、教科化以前の「道徳の時間」(いわゆる「特設道徳」と区別することとしたい。

二 先行研究のレビュー

ジェンダーの視点からの道徳科の教科書の内容分析をした研究は、それ程多くはない。道徳の教科化に慎重な研究者による分析が多数で

あり、教科化を推進してきた研究者の論考はほとんど見られない。

橋本(二〇一九)は、ジェンダーやセクシャリテイの視点から、中学校の教科書の内容分析を行ったところ、①思春期の子ども達が性的存在でもあることを認めない、人間の多様性や人権の尊重という時にも、LGBTIを射程に入れて教材や資料を提供しているところが極端に少なく、国際水準とは大きくかけ離れている、②仕事を持つていたとしても、家事、育児、老人介護は女性の役割という性別役割分業が前提で描かれ、社会的サポートの視点は欠落し、個別家族内での分担、責任が強調される、③性別を超えた職業選択など、子ども達のロールモデルになる教材もあるが、労働は勤労奉仕に矮小化され、女性性も動員される―の三点を指摘している。

伊東(二〇一九a)は、二〇一八年刊行の中学校教科書を分析し、副読本時代と比べて、各社に共通する資料が大幅に増加し、文部科学省作成の『私たちの道徳』や読み物資料も多く含まれ、編集委員会作成のフィクションの教材が多いことを指摘している。また、伊東(二〇一九b)は、二〇一八年刊行の小学校教科書を分析し、中学校教科書と同様に、副読本時代と比べて、共通資料の増加と文部科学省作成の読み物資料の増加を見いだしている。さらに、ジェンダーの視点から教材を分析すると、主人公が男性に偏っている(全体の六四%)ことを見いだしている。スポーツ選手は、男女のバランスがよく取り上げられているものの、それ以外は男性が多く、職業も多様である。他方、女性は、ナイチンゲール、ヘレン・ケラー、マザー・テレサに集中している。

池谷(二〇一八)は、二〇一八年刊行の中学校教科書の内容分析をして、家族主義とジェンダー・セクシャリテイの無視が見られることを指摘している。共働きの家庭や母子家庭も登場するが、総じて父母からなる家族と性別役割分担は自明の前提とされ、家族に対する母親の献身やそれに対する感謝が専ら主張されている。ジェンダーを取り上げている教材でも、心がけの問題に収斂しており、LGBTを取り上げた教材は少なく、I(インターセクシャル)を取り上げた教材は社のみであり、トランスジェンダーの教材はあっても、同性愛を教材としたものは皆無である。中学生の友情・恋愛を取り上げた教材は多数あるが、恋愛を異性間の友情の枠内に閉じ込めているのが多数を占めている。

次に、池谷(二〇一九)は、新自由主義(ネオリベ)の視点から、中学校教科書の内容分析を行った。共働き家庭の母親が、祖母の介護を担っている(父親は家事をしない)が、会社で昇進の話がきても家族のケアのために、昇進を断るといふ教材を取り上げ、仕事をしながら家族をマネジメントするネオリベ母性が賛美されると批判している。そして、池谷(二〇二〇)は、二〇二二年版の中学校教科書の内容分析をして、二〇一八年版と比較したところ、①教材は大きくは変わっていないこと、②教材末の質問項目の増加と、「考える道徳」「議論する道徳」になるように生徒に討論させる項目の提示、③スマホ関連や障害者関連の教材の増加、職場体験と結びつけて労働を取り上げた教材の増加、④全社が自己評価欄を設けたこと―の四点を見いだしている。ジェンダーやLGBTを取り上げた教材は、池谷(二〇一八)の結

果と大差が見られない。共働き家庭や父母が登場しても、父親が出てこない「父親不在」の教材が多い。増加したスマホ関連教材の主人公の多くが女子であることも問題だと指摘している。LGBTを扱った教材でも、生物学的性を男女のみと誤って記述されている点も指摘している。

今関(二〇一九)は、女性の人権(ジェンダー)の視点から、教科書の記述内容(中学校用九教材)を分析している。分析の視点は、①女性・弱者の人権、②押しつけられた性別役割分業、③セクハラを伴って存在する女性差別―の三点である。主として問題のある教材を紹介するだけに留まらず、これらの教材を授業で取り扱う際の改善すべき点や留意点、発問の工夫が具体的に述べられている点、有益であると思われる。

三 学習指導要領作成者のジェンダー比

学習指導要領作成者のジェンダー比を調べたところ、以下のようになった。小学校の学習指導要領作成者は、学識経験者・教諭、指導主事、校長などの管理職が九名、文部科学省関係者が五名で、両者を合わせた総数の内、女性は三名で、二一・四%を占めていた。

他方、中学校の学習指導要領作成者は、学識経験者が一〇名、文部科学省関係者が五名で、両者を合わせた総数の内、女性は三名で、二〇・〇%を占めていた。

小学校の「家庭科」「外国語活動・外国語科」などの一部の教科を

除き、女性の占有率は二〇%前後と低迷しており、道徳科のみが低いわけではない。しかし、女性の視点からの問題提起が弱いように感じられる。

四 教科書執筆者のジェンダー比

次に、教科書執筆者のジェンダー比を紹介しよう。教科書執筆者には、監修者・顧問等を含めたが、情報モラルや特別支援教育・ユニバーサルデザインについての監修者(各社一〜二名は除外した)。

執筆者数は、教科書会社により幅があり、小学校用では最も多いのが東京書籍の五二名(他に氏名が明記されていない者が四名)、最も少ないのが東京書籍の五七名(他に氏名が明記されていない者が四名)、最も少ないのが日本教科書の一九名であった(平均二九・三名)。なお、学校図書は、二〇二二年度以降中学校の教科書の刊行から撤退しており、日本教科書は当初から中学校用のみに参入しており、光文書院は小学校用のみに参入している。

小学校用教科書の執筆者では、女性の占める割合が上位の三社を挙げると、光文書院(三六・六%)、光村図書(三三・三%)、廣済堂あかつき(二九・四%)になる。逆に下位の三社を挙げると、教育出版(二三・六%)、日本文教出版(一四・三%)、東京書籍(一七・三%)になる。

中学校用教科書の執筆者では、女性の占める割合が上位の三社を挙げると、光村図書(三三・三%)、教育出版(三一・八%)、学研教育みら

い(二五・八%)になる。逆に下位の三社を挙げると、日本文教出版(八・八%)、東京書籍(一七・五%)、日本教科書(二一・一%)になる。

二〇二二年度の学校基本調査(速報値)によれば、小学校教員の中で女性の占める割合は六二・四%、中学校教員の中で女性の占める割合は四四・三%、義務教育学校教員の中で女性の占める割合は五三・六%である。これらのデータから見ても、教科書執筆者における女性の割合は低すぎることが見いだせる。

五 ジェンダーの視点から見て課題のある教科書教材

(1) 教科書教材を分析する視点

はじめに、教科書教材を分析する視点について述べておきたい。二〇二二年度版の道徳科の教科書は、小学校用が八社、中学校用が七社から刊行されている。学習指導要領で示された内容項目に対応した教材で構成され、三五の教材が収録されている(一部の教科書では、さらに補足資料として、二〜五つの教材が巻末に収録)。

なお、内容項目は、小学校低学年では一九、同中学年では二〇、同高学年では二二、中学校では二二となつている。そのため、一つの内容項目に対して一〜三教材が配置されていることになる。

ジェンダーの視点から見て課題のある教科書教材と好感のもてる教材を選択するに際しては、以下のような観点で抽出した。教科書と一部の教師用指導書を読み込み、併せて先行研究での分析を参照にしな

がら、一五点ほど抽出した。また、小学校・中学校教師を含む私的な研究会でも筆者が紹介し、意見を求めた。先行研究の知見や考察に同意できる教材もあれば、少し異なる捉え方をもつ教材もあった。

教科書会社の指導書や授業資料は、当然ながら教材については肯定的評価で好ましいものとされており、他方、道徳科について批判的な研究者や実践者(もちろん、道徳教育を否定しているわけではない)の分析の視点は厳しいことが見いだされた。教材の「よさ」や問題点を考える際、どうしても分析者の主観が入ることはやむを得ないが、極力筆者の主観が入り込まないように留意した。この点を理解して頂きたいと思う。

本節ではジェンダーの視点から見て課題のある教科書教材を、次節ではジェンダーの視点から見て好感のもてる教材を紹介し、筆者の見解と指導に際しての配慮すべき点について述べていこう。

(2) 『お母さん、かぜでねこむーちびまる子ちゃん』

(光文書院 小学三年)

教材の概要は、以下の通りである。

夜になってから、まる子が母に雑巾が必要なので作って欲しいと頼み、母は遅くまでかかって雑巾を作った。翌朝、母は風邪を引き、寝込んでしまう。夕食は姉と祖母とまる子で作り、看病もする。まる子は母にわがままを言ったと後悔し、泣きながら眠る。

内容項目は「家族愛、家庭生活の充実」である。

さくら家は三世代同居であるが、男性である父と祖父は、この教材

には登場しない。家事は女性がやるものという古い性別役割分業観が顕著に現れている教材である。さらに、末尾の発問として、「自分のかぞくのすてきだと思ふところを、そのように思うわけをまとめましょう。」と「自分のかぞくにつたえたいことを、手紙に書いてみましょう。」が提示されている。ひとり親の家庭や虐待を受けた子どもが増えているので、このような発問は、当該児にとっては酷なものになっている。「家族愛、家庭生活の充実」の単元では、差し替えも含め、慎重な扱いが必要であろう。

(3) 『ブラッドレーのせいぎゆう書』

『お母さんのせいぎゆう書』

(小学校中学年全社)

小学校用教科書の全社(八社)に掲載されている教材であり、三年配当が三社、四年配当が五社である。原典は、ゲルエンベルグ『子供と金銭教育』である。主人公が原典と異なり日本人となっているのが、日本文教出版(だいすけ)、学研教育みらい(たかし)、東京書籍(たかし)の三社である。

教材の概要は、以下の通りである。

ブラッドレーが朝食時にお母さん宛の請求書を食卓に置いた。母親はそれを読んで、昼食時にブラッドレーが請求した金額のお金を食卓に置き、併せてブラッドレーへの請求書が添付されていた。ブラッドレーへの請求書の額は〇ドル(日本の男児の場合は〇円)であり、それを読んだ彼は涙をこぼした。

請求内容も内訳も、教科書会社により微妙に異なっている。ブラッ

ドレーが書いた請求書は、請求内容が、お使い代、留守番代、おけいこに行つたごほうび代などが多数を占め、請求額は二ドルから六ドル、日本人版は四〇〇円と五〇〇円と多岐にわたっている。母親が書いた請求書は、請求内容が、親切にしてあげた代、病気の時の看病代、洋服やくつ、おもちゃ代、食事代や部屋の掃除代などであり、全て〇ドル(〇円)であった。

内容項目は「家族愛、家庭生活の充実」である。

原典は金銭教育のための書籍であり、「家族愛、家庭生活の充実」に結びつけることに、若干の疑問を感じる。東京書籍(四年)では、たかしが主人公であるが、指導書の「教材観」では、「たかしと母の請求書の違いに目を向けるようにして、〇円の請求書にこめられた母の思いについて想像することで、家族の愛情について考えられるようにする。そして、母の請求書を何度も読み返す「たかし」の思いを考えようとすることで、家族と協力し合つて楽しい家庭をつくろうとする心情を育てたい。」となっている。また、教科書に記載されている中心発問の一つは、「家族との生活で、あなたはどんなことを大切にしたいと思ひますか。」であるが、反応例として「家族への感謝の気持ちをお忘れなようにしたい。」「家族のために自分から進んでお手伝いをしてほしい。」などが挙げられている。(2)で紹介した『お母さん、かぜでねこむーちびまる子ちゃん』と同様に、ひとり親の家庭や虐待を受けた子どもがいる学級では、発問の内容も含めて慎重な扱い方が求められよう。

この教材の最大の問題点は、専業主婦の家事労働がアンペイドワー

ク(無償労働)であることに触れられていない点である。勿論、小学校
中学年の児童にはアンペイドワークを考えさせることは、難しいと言
える。光村図書の中学校用教科書では、小学校で学んだ教材を再学習
させ(例えば、「橋の上のおおかみ」「手品師」)、考え方の変容や道徳性の
深まりを把握できるようにしている。この教材も、中学生になって
再学習することの意義は大きいと言えよう。

ところで、宮澤・池田(二〇一八)や宮澤(二〇一九)は、「中断読み」
や「分断読み」を提唱している。「中断読み」とは、教材の文章を途
中で読むのを止める読み方であり、「分断読み」とは、教材の文章を
一気に終わりまで読むのではなく、重要なポイントで読むことを一度
中止し、児童・生徒で話し合わせ、その後、次の段落へ進み、また話
し合わせる読み方である。

『ブラッドレーのせいきゆう書』『お母さんのせいきゆう書』は、
「分断読み」が適している。母親がブラッドレーが書いた請求書を見
たところまで読み、ブラッドレーや母親の気持ちについて話し合わせ
る。次に、昼食時に請求額通りのお金が食卓に置かれていたところま
で読み、ブラッドレーの気持ちについて話し合わせ、母親からの請求
書にはどんなことが書かれているか、予想させる。そして、最後まで
読み、ブラッドレーの気持ちがどのように変化したか、話し合わせる
といった授業の流れである。ブラッドレーの請求書通りのお金がもら
えるのか、もしくは母親から叱られるのか、そして、請求額通りのお
金ももらえて嬉しいなどの感情、母親はどうして彼への請求書が〇ド
ル(〇円)だったのか、子ども達の考え方に変容が見られるはずであり、

多様な考え方や意見が出されるであろう。最初に、結論・徳目ありき
ではなく、「考えさせる道徳」「議論する道徳」の授業になると思われ
る。

(4) 『ライフ・ロール』(日本教科書 中学三年)

教材の概要は、以下の通りである。

共働き家庭で、三姉妹がいる家庭が登場する。父親は家事をせず、
夜九時頃に帰宅し、ビールを飲みながら夕食をとるのが習慣となつて
いる。他方、母親は家事を行い、祖母の介護も引き受けている。母親
の会社から管理職への昇進の話があつたが、家庭の事情を鑑み断つた。
内容項目は「社会参画、公共の精神」である。

前述の『お母さん、かせてねこむーちびまる子ちゃん』と同様に、
男性の父親は全く家事を行わないという「父親不在」の点が共通点で
ある。新性別役割分業(夫は仕事、妻は仕事と家事・育児・介護を肯定・
是認するような内容となつている。池谷(二〇二〇)は、「ネオリベ母
性」の典型例と捉えている。

授業では、家事や介護について、家族全員でワークシェアリングす
ることの必要性(つまりこの教材のもつ問題性を明らかにする)を考えさせ
る必要がある。

道徳科の教科書には、高齢者や認知症の親の介護を母親(主婦である
場合も労働者である場合も)がするというストーリーが多い。高齢社会
の課題としての介護問題を見つめさせ、自助や共助に終始するのでは
なく、公助の必要性を考えさせることが必要である。

六 ジェンダーの視点から見て好感のもてる教科書教材

(1) 『親友』（光村図書 中学二年）

教材の概要は、以下の通りである。

主人公の健太が小学五年の時、子供会のプレゼント交換で、自分が編んだマフラーをプレゼントとして提出した。「僕が編んだ」と発言すると静まりかえり、笑いも出た時、美咲が「上手に編めてる。健太君って、天才?」と言い、彼は救われた。美咲はサッカーが上手く、魚釣りは健太と同じくらいの腕前で仲良くなつた。美咲はスカートを履かず、髪の毛は短くいわゆる「ボーイッシュ」なタイプで、女子より男子とよく遊んだ。健太の自宅に美咲が遊びに来た日の夕食時に、健太は「美咲は女なのに、サッカーも上手いし、釣りだってすごく上手」と自慢げに話すと、母は『女なのに』っていう言い方は失礼じゃない? 女だとか男だとか関係なく、自分らしく堂々と生きていく美咲さんは、素敵だと思うよ。」とたしなめた。

中学校に入っても同じクラスで、昼休みに美咲とサッカーをしたが、制服のスカートが邪魔をした。彼は「美咲もスカートを履くんだけ」と、恥ずかしいような寂しいような気持ちになった。美咲はスカートがサッカーに適さないと熱く語った。男子達が健太に対して、女子とサッカーをしていることを揶揄した際に、美咲は「男とか、女とか関係

係ないだろ。サッカーが好きだからサッカーをして何が悪いんだよ。」と言いつ返した。彼は何も言えなくなり、一步も踏み出せないまま美咲を見つめ、その場に立っていた。

内容項目は「友情、信頼」である。編集委員会作成のフィクション教材であるが、固定的なジェンダー観を改めさせる側面をもつ。性別にとらわれない考え方の理解促進と思春期を迎えた中学1年生に様々な心情を考えさせることができよう。一部の中学校では、制服の見直しが行われているが、スカートとパンツのどちらかを選択できる性別違和に対応した事例の紹介も授業で行うことができよう。

(2) 『自分らしい多様な生き方を共に実現させるためにできること』と『 』（学校図書 二〇一八年版 中学二年）

学校図書は、二〇二〇年版から中学校教科書の刊行から撤退したので、残念ながら現在は使用できない。教材の概要は、以下の通りである。

最初に、セクシャリティを「からだの性」「こころの性」「好きになる性」の三要素から説明し、「セクシャル・マイノリティ」「LGB T」を紹介している。そして、NPO法人PEEPが行った多様な性を持つ学ぶための勉強会を取り上げた新聞記事を紹介している。勉強会では、同性が好きの人、男性も女性も好きな人、生まれた性と心の性が違う人など紹介し、どれも一つの性のあり方に過ぎないと講師は述べている。そして、女性として生まれ、今は男性として過ごす大学生の生き方を紹介している。養護教諭の松本さんが性同一性障害(現在は「性別

違和」の生徒(FTM)との関わりについて、制服の着用、トイレの増設、宿泊旅行での別室配慮、居場所づくりなどを具体的に紹介している。

内容項目は「公正、公平、社会正義」である。

池谷(二〇一八)が指摘するように、I(インターセクシャル)を取り上げていない点が弱点であるが、教科化前の副読本時代には見られなかった「セクシャル・マイノリティ」の教材であり、大きな進歩が感じられる。他社の教科書には見られない良さがある(ただし、日本文教出版中学三年『ゴリラのまねをした彼女を好きになった』の参考資料では、「さまざまな性」の記述で「インターセクシャル」が触れられている)。

指導上の留意点としては、学級にLGBTIの生徒がいる場合、アウティングや差別などが起こらないように慎重に進めることである。

この教材と対照的なのが、文部科学省作成の副読本『私たちの道徳』、中学校用の「異性を理解し尊重して」である。記述の中の見出しが「好きな異性がいるのは自然なこと」であり、本文では「中学生で、好きな異性や意識してしまう異性がいるのは不思議ではない。むしろそれは自然な気持ちで、大切にしなければならぬ気持ちだ。この気持ちを、明日に生きるエネルギーにできたらいいと思う。だけど、二人だけのカラに籠もってしまうと、周りが見えなくなると、人間としての幅を狭めてしまうことがあるかもしれない。」との記述となっている。ここにはLGBTIの児童生徒への配慮は見られない(藤岡、二〇一八)。ただし、教師用の指導資料には、「性同一性障害に係る生徒に対しては、生徒の心情に十分配慮した対応を行うようにする。」という文部科学省通知が記載されているが、性のダイバーシティの観

点からは不十分である。二〇一九年にWHO(世界保健機構)は、性同一性障害を精神障害から外すことを決め、性別違和に改められ、障害ではない点も付記しておく。現在も『私たちの道徳』も使用可能になっているので、不適切な記述のままの放置は好ましくない。

(3) 『撮れなかつた一枚の写真』(光村図書 中学一年)

教材の概要は、以下の通りである。

「フォト・ジャーナリスト」の吉田ルイ子さんのベトナム戦争時の出来事を紹介した教材で、避難してきた母親と赤ん坊の写真を撮ろうとしたが、母親が赤ん坊の顔を手で覆い、カメラのレンズから顔をそむけ、結局シャッターを押すことができなかった。撮りたかった写真が撮れなかつたことへの後悔や呵責に悩まされたが、「プロのフォト・ジャーナリストである前に、私は一人の普通の人間でありたい。」と捉え直した。

内容項目は「よりよく生きる喜び」である。

この教材は、ジェンダーの視点だけでなく、戦争と平和、共生、国際理解教育、生命の尊重、キャリア教育など多岐にわたった視点での指導が可能である。一九七〇年代には日本のプロの女性カメラマンは少なく、ジェンダーの視点でもキャリア教育の視点でも、彼女が中学生のロールモデルになる点で、好ましい教材である。また、戦争は弱者である女性や子どもを犠牲にすることも考えさせたい。

(4) 『ねぶたを夢見て』（学研教育みらい 中学三年）

教材の概要は、以下の通りである。

青森のねぶた祭のねぶたを作成する女性初の「ねぶた師」のキャリア形成を取り上げた教材であり、これまで男性に限定されていた「ねぶた師」にチャレンジする姿が描かれている。

内容項目は「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」である。内容項目に収斂せず、男性社会である「ねぶた師」の中に飛び込み、男性スタッフからは相手にされず、指導もないなかで、苦勞しながら成長する過程を学ばせたい。キャリア教育の視点から、性別に影響や支配される職業があることも理解させつつ、それを乗り越えさせる指導が求められる。

職業理解についても、アンコンシヤス・バイアス（無意識の偏見があることを触れると良い（藤岡、二〇二二））。アンコンシヤス・バイアスの例としては、親の職業が飛行機パイロットと保育士であれば、多くの生徒は父親が飛行機パイロット、母親が保育士と捉えてしまうことである。職業名も性別を越境し、看護婦が看護師に、保母・保父が保育士に、スチュワーデス・スチュワードがキャビンアテンダントに改められたのも、ジェンダーのバイアスを減らすためである。本教材は、キャリア教育の方向性を示してくれるだろう。

(5) 『明日、みんなで着よう』（光村図書 中学二年）

教材の概要は、以下の通りである。

カナダの一人の男子生徒がピンク色のポロシャツを着て登校したというだけで、からかわれ、いじめが起こった。それを知った上級生の男子生徒が、友人と話し合い、放課後、ピンクのシャツやタンクトップを沢山購入し、メールやインターネット上にある学校の掲示板で、「明日、みんなでピンクのシャツを着て登校しよう」と呼びかけた。翌日、三〇〇人以上の生徒がピンク色の服やバンダナ、リボン、リストバンドなどを身につけて登校したという、「ピンクシャツデー」を取り上げたものである。編集委員会作成の教材であるが、事実に基づいたものであり、最後に、日本での「ピンクシャツデー」の取り組みも紹介されている。

内容項目は「公正、公平、社会正義」である。この教材は、「いじめ」を扱ったものであり、巻末には「『いじめ』をなくすために大切なことは何か、考えよう。」というタイトルで資料・発展教材が提示されている。しかしながら、単なる「いじめ」問題だけではなく、性別違和と思われる男子生徒が着用している服の色が原因でいじめに遭っていることに気づかせ、視野を広げた指導ができる点で有益である。現実に、保育園で性別違和の園児（戸籍上は男性だが、性自認は女性）がピンク色の服装をして登園した際に、他の園児からからかわれて不登園になったことで、第三者委員会が「いじめ」と認定した大津市立保育園の事例（朝日新聞大阪本社、二〇二二）がある。そして、LGBTIについても言及できる教材であり、教科書を学習するだけでなく、様々な関連資料を用いることにより、学習の深まりが可能となるであろう。

七 おわりに

最初に、道徳科の学習指導要領作成者や教科書執筆者の中で女性の占める割合が低いことを見いだした。このことから、ジェンダーの視点からの教材づくりにも一定の影響があると考えられる。そして、ジェンダーの視点から見て課題のある教材と好感のもてる教材を紹介し、分析をした。先行研究の知見と概ね合致する結果となったが、一部では筆者なりの見解を示した。

道徳科の授業は、教科書を教えるのではなく、教科書でも教えるという視点が大切である。ジェンダーを取り扱った授業では、補足資料の配付やLGBTI当事者の講演やビデオ視聴など創意工夫を行い、心に響く授業にすることが求められる。中学校学習指導要領(文部科学省、二〇一八)でも、教科書の使用義務に触れつつ、「道徳教育の特性に鑑みれば、各地域に根ざした郷土資料など、多様な教材を併せて活用することが重要である。」と記されている。

現代の家族は、ひとり親家庭、ステップファミリーなど多様であり、貧困や虐待、ヤングケアラーの問題を抱えている家庭もある。内容項目「家族愛、家庭生活の充実」の扱い方は、十全の教材研究と児童・生徒の家庭環境の把握が大切であり、必要に応じて他教材と差し替える必要がある。

また、内容項目「勤労」の教材には、女性の労働を取り上げていても、単純作業や軽作業の仕事になっているものがある。職業に貴賤は

ないが、男性の働く姿とは違和感を感じる。専門的・技術的職業従事者や管理的職業従事者における女性の占める割合は低いことや非正規労働者の女性の割合が高いことも、補足資料を用いて理解させたい。教科書に記載されている「中心発問」や「補助発問」に縛られず、「考える道徳」「議論する道徳」が展開できる授業づくりを期待したい。

文献

- 朝日新聞大阪本社(二〇二二)「性別違和」園児いじめ 大津市立保育園 第三者委、一件認定 朝日新聞二〇二二年七月七日期刊
- 藤岡秀樹(二〇〇四)『心の教育』と教師教育 日本教師教育学会年報 13、四五―五二頁。
- 藤岡秀樹(二〇一八)『特別の教科「道徳」―教材論・指導論・評価論に焦点を当てて― 心理学』39(2)、二二―三二頁。
- 藤岡秀樹(二〇二〇)『道徳(4節1〜4) 心理学研究会(編)『中学・高校教師になるための教育心理学 第4版』有斐閣、一三〇―一四三頁。
- 藤岡秀樹(二〇二二)『道徳科の指導―大学生の道徳教育に対する意識と教科書の内容分析― 今日からはじめる楽しい授業づくり』10、六七―七六頁。
- 橋本紀子(二〇一九)『道徳教育におけるジェンダー・セクシャリティの問題― 中学校「特別の教科 道徳」の教科書分析を中心に― 藤田昌士・奥平康照(監修)『道徳教育の批判と創造―社会転換期を拓く』エイデル研究所、一〇〇―一二〇頁。
- 池谷壽夫(二〇一八)『中学校「特別の教科 道徳」教科書の問題性 教育(二〇一八年八月号)、一三二―一四〇頁。
- 池谷壽夫(二〇一九)『新自由主義にきわめて親和的な道徳―中学校「特別の教科 道徳」教科書の本質 人間と教育』101、四〇―四七頁。
- 池谷壽夫(二〇二二)『中学校「特別の教科 道徳」教科書(二〇二二年度)の特徴と問題点 民主教育研究所年報 20、八八―九七頁。

- 今関和子(二〇一九)『特別の教科 道徳』は、弱者の人権を尊重しているか——女性の人権(ジェンダー)の視点に立って教材を分析する——大和久勝・笠原明男・今関和子『いじめ・ジェンダーと道徳教科書 どう読む、どう使う』クリエイツかもがわ、一〇三—一六〇頁。
- 伊東 毅(二〇一九a) 中学校用道徳科教科書の特質——これまでの副読本との比較を通して——藤田昌士・奥平康照(監修)『道徳教育の批判と創造——社会転換期を拓く』エイデル研究所、六二—八一頁。
- 伊東 毅(二〇一九b) 小学校用道徳科教科書の特質——これまでの副読本との比較を通して——人間と教育 101、三二—三九頁。
- 宮澤弘道(二〇一九) 自由な思考を広げる「中断読み」 教育(二〇一九年三月号)、六八—七五頁。
- 宮澤弘道・池田賢市(二〇一八)『特別の教科 道徳』ってなんだ?——子どもの内面に介入しない授業・評価の実践例——現代書館、三〇—三七頁。
- 文部科学省(二〇一八)『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』教育出版
- 東京書籍『新しい道徳』編集委員会(二〇一八)『新しい道徳4 教師用指導書 指導編・研究編』東京書籍